琉球大学学術リポジトリ

COEシンポジウム・ワークショップ実施報告

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム広報委員会 公開日: 2009-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9470

ＣＯＥシンポジウム・ワークショップ実施報告

（6月～12月）

国際ワークショップ
Biodiversity and Invasive Species: Lessons from the neighbouring regions
2008年11月１日（10:00-18:00）
琉球大学法文学部講義棟

伊澤雅子（生態系の多様性研究グループ）
太田英利（種の多様性研究グループ）

生物多様性の保全の上で外来種問題の解決が急務であることは衆目の一致するところである。このCOEの中でもいくつかの機会にこの話題を取り上げて来た。外来種問題は、対象となる地域の特性によってその深刻さの度合いが異なり、ある地域で複数の在来種を絶滅に追いやっている外来種が、他の地域ではまったく問題視されていない場合もある。理由はその土地その土地の地勢、地史、気候、さらには在来生物群集の種組成、群集構造といった特性による影響が大きいためとされる。特に、島嶼であるか大陸であるか、温帯に位置するか熱帯（亜熱帯）に位置するかといった条件は、しばしば重要な影響要因と考えられる。

国内では2005年にいわゆる外来生物法が施行され、本格的な外来種の防除が始まった。しかし現実には、残念ながら対策が後手に回ることも少なくなく、気がついた時には重要な侵略的外来種の除去に多大な人的、経済的コストを要する状態となっている事例が多く見られる。

本ワークショップでは近隣の島嶼域を中心に、類似した問題を抱える海外の国や地域から外来種の研究や対策に従事する専門家を招き、それぞれの問題の要点や解決策などについて話題を提供して頂いた。そして問題点の認識を共有しつつ、本COEプログラムに参加している若手を中心とした研究者や一般参加者とともに、琉球列島の外来種問題解決へのヒントに繋がる議論を目指した。

会場風景

スピーカーには海外からハワイ、サモア、イタリア、イギリス、シンガポール、韓国の７名を迎え、琉球大学理工学研究科の大学院生２名を加えた。提供された話題は生態系全般の保全から、哺乳類、鳥類、両生爬虫類、海洋生物に関するものまで多岐に及んだ。最初に、ハワイにおける生態系全体の保全の取り組みについてDr. Yamamotoに紹介頂いた。彼は音楽付の動画でハワイに特徴的な動植物や自然景観を多く紹介し、我々はその美しさにしばしうっとりとなった。しかし、その後からはDr. Krausの外来性両生爬虫類の話題、Dr. Keyの外来性ネズミ類の話題など琉球列島にも共通する問題事例の紹介が続き、一気に現実に引き戻される。続くDr. Bertolinoのヌートリアの話では、ただ１種の外来種でさえ１度定着を許してしまうとその除去にいかに多大な労力と経費がかかるかが示され愕然となり、さらにDr. Robertsonの侵略的外来性哺乳類に関する深刻な事例の紹介が続いた。弾丸のような英語で盛りだくさんに紹介されたDr. Ngによる海棲外来種の事例からは、水域での外来種防除の難しさを実感させられた。

Dr. Bertolino（左）とDr. Ng（右）の講演

Dr. Robertsonの講演での討論

その後休憩をはさんでDr. Ohの流暢な日本語によるプレゼンテーションがなされた。その中で紹介された、原産地である大陸では稀少種であったはずの種が人為的に島に持ち込まれて定着し大問題となった経緯は、多くの島嶼を抱える琉球列島を研究フィールドとする我々にとって、ひとつの具体的な警鐘となった。最後は本学の２名の大学院生によって、あまり注目されない中で深刻化しつつある琉球列島での外来性淡水魚の現況、そしてカメ類における外来種との交雑を通した在来種個体群内での遺伝的撹乱の事例が紹介された。

このように１日のワークショップとしては異例とも言える９名ものスピーカーを迎え、午前10時から午後６時まで（１時間半の昼休みを除いても）６時間半にも及ぶ長時間のワークショップであった。総合討論では、さらにDr. Robertsonから総括的なまとめも提示された。議論はつきず、その後に行われた懇親会でも活発な議論が続けられた。海外からのスピーカーのうちの３名は10月末に那覇で開催された外来性哺乳類に関する国際シンポジウムへの出席者で、そのまま居残る形で本ワークショップにご参加頂いた。それぞれの研究者の高度な研究内容や研究哲学もさることながら、こうしたハードスケジュールにも関わらず疲れもみせないバイタリティにも、われわれは心から感服した。本ワークショップの主旨に合わせ、上記国際シンポとは多少なりとも異なる内容の講演を準備して下さったこと、彼らを含む海外からのスピーカー諸氏が皆、積極的にCOEのポスドクや大学院生と議論して下さったことなどには、特に感謝申し上げたい。なおこの日は折しも土屋誠COEリーダーの60才の誕生日で、レセプションで行なわれた赤いちゃんちゃんこに赤烏帽子といういでたちでの伝統的な還暦祝いは、海外からのスピーカーにはとりわけ人気を博し、しばしカメラのフラッシュが止まなかった。

懇親会の記念撮影：赤い装束は土屋誠COEリーダー（本文参照）

ワークショップ終了から帰国までの間、海外からの参加者は野外での動植物の観察、そして本COEとの連携で展示や研究資料データベースの充実が進む本学資料館（風樹館）の見学などを思い思いに楽しまれていた。翌日に本学理学部の進化・生態学講座の研究室を訪問頂いたDr. KeyとDr. Yamamotoは、オオコウモリの研究について博士研究員と議論され、サモアのオオコウモリとの生態や保護の現状などについて貴重なお話も伺うことができた。

以上のように今回の国際ワークショップは、とりわけ本COEに参加する大学院生や若手研究者らにとって、極めて刺激的な議論、情報収集の場となったと考えられる。これを契機とした今後のさらなる国際ネットワークの強化、関連する課題における研究の進展を期待したい。

動物飼育温室での議論（左から筆者、Dr. Key，中本博士, Dr. Yamamoto）

国際シンポジウム
沖縄の生物の未来
～生物多様性の島から環境を考える～

2008年11月3日（13:00-17:10）
沖縄コンベンションセンター会議棟A

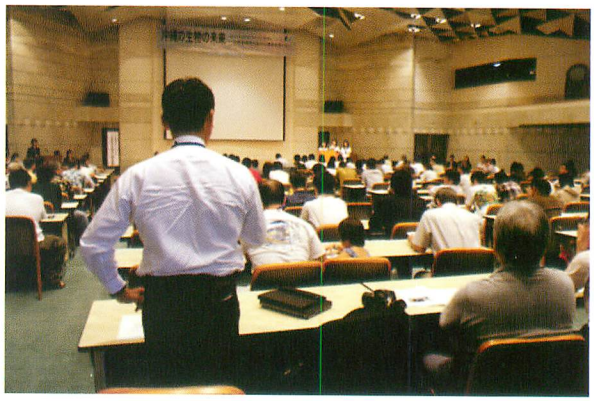
傳田哲郎（種の多様性研究グループ）

琉球列島は生物多様性の宝庫と言われながら、11月１日のワークショップで取り上げられた外来種問題を始め、その現状と将来については懸念材料が山積している。生物多様性の価値に対する理解を地域社会が共有し、次世代に継承していくためには、若い力と新しい発想が必要である。本シンポジウムでは、将来を担う高校生と研究者が一緒に沖縄の生物の未来について語り合うことを目的とし、高校生による研究発表、COE研究員等によるポスター発表、ならびに、研究者も交えてのパネルディスカッションをおこなった。

11月3日の文化の日、生憎の雨にもかかわらず、会場には200名近い参加者がつめかけた。開会挨拶、主旨説明に続いておこなわれた高校生の研究発表では、辺土名高校サイエンス部（新崎えみ・儀保まどか・比嘉瑞恵）、宮古高校生物クラブ（洲鎌理恵・下地瑞姫・本永明）、開邦高校科学部（大平洋美・町田美由季）が話題を提供してくれた。

高校生による発表風景

辺土名高校の生徒達は、大宜味村及び周辺の野鳥の分布について1993年と2007年の調査結果を比較し、ヤンバルクイナの分布域が縮小して北部に追いやられている実情などについて発表してくれた。続いて発表した宮古高校の生徒達は宮古島に多く見られる湧水域の環境・生物調査の結果を、開放高校の生徒達は沖縄島南部の弁ヶ嶽におけるリターの分解と土壌動物相に関する調査の結果を紹介してくれた。会場からは調査方法や解析方法など専門的な内容に関する質問や意見が出された他、それぞれの高校が立地条件を活かし、身近な環境を題材にして活動に取り組んでいることや、足下の自然を純粋な目で観察している高校生達の姿勢について評価する声が多く聞かれた。



会場からは多くの質問・意見が出された

ポスターの前で熱心に議論する発表者と高校生

引き続いて、研究の成果を一般にわかりやすく伝えることを目的としたポスター発表がおこなわれた。ポスター会場では、パネルディスカッションを次ぎに控えた高校生達が、緊張も忘れてCOE研究員達の話に熱心に聞き入っている姿が見られた。会場は熱気にあふれ、ポスター発表の目的は十分達成できたように思う。また、各高校の先生達が、生徒達を置き去り（？）にして研究の話に熱中している姿も印象に残った。今回参加していたいただいた城間篤先生（辺土名高校）、北村崇明先生（宮古高校）、新城憲一先生（開邦高校）

をはじめ、現場の先生達の熱意が高校生の研究活動を支えていることを、改めて感じさせられた一幕であった。

パネルディスカッションでは、ハワイ・カウアイ大学のブライアン=ヤマモト博士、韓国・チェジュ大学のオー=ホンシック博士、沖縄タイムスの中根学氏、琉球新報の外間聡氏、COE研究員の新垣誠司博士から高校生の研究発表についてコメントをいただいた他、高校生達も加わって、身近な自然を地域で継承していくことや、研究活動を継続していくことの重要性について意見が交わされた。

パネルディスカッションの風景

ハワイで環境教育に携わっておられるヤマモト博士からは、小学校（身近な自然に触れる）、中学校（調査方法を学ぶ）、高校（研究活動をおこなう）と、段階を踏みながら環境教育を展開していくことの重要性が指摘された。同時に、子供達を指導する立場にある学校の先生を教育するプログラムの必要性を強調されていたように思う。近年、出前授業や科学教室など、理科教育支援を目的とした高校と大学の連携が盛んにおこなわれているが、単発的な企画で終わることも多いのではないだろうか。“知の継承・活動の継続”を大学の立場から考えたとき、ヤマモト博士が指摘された“先生のための教育プログラム”は非常に重要な取り組みであると感じた。

ヤマモト博士のコメントに聞き入る高校生

土屋リーダーから記念品贈呈

シンポジウムは、土屋誠COEリーダーからの記念品贈呈で幕を閉じた。シンポジウム終了後、参加者から「…何よりも、参加してくれた高校生のみなさんが楽しんでいて、ちょっと臆しながらも自分の意見を言える雰囲気だったことが、よかったと思います」とのコメントが寄せられた。これはシンポジウムの運営に関わったCOE関係者が一様に感じた印象でもある。純粋で活力にあふれた高校生達の姿に、未来への希望を感じた一日であった。